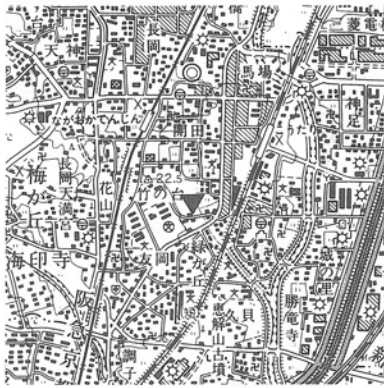




(京都西南部)

調査区は東西約四m南北約三三m、調査面積は約一三二㎡。検出遺構は掘立柱建物・素掘溝・石組護岸溝などがある。
掘立柱建物は、屋内に甕据付け穴と思われる土坑が並び、醸造関連施設と考えられる。掘立柱建物柱穴から、長岡京期の土器類とともに「石上朝／石上朝」と書かれた紡錘車状墨書土製

京都・長岡京跡

ながおかきょう

- 1 所在地 京都府長岡京市神足四丁目
- 2 調査期間 右京第七一三次 二〇〇一年(平13) 八月～九月
- 3 発掘機関 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 岩崎 誠
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 長岡京期(七八四年～七九四年)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は右京七条二坊七町に位置し、南は七条条間小路に面する。

品(土師器食膳形態底部の再加工土製品)が出土した。

石組護岸溝SD一二は、北側のみ石組で護岸しており、北側の立地条件の悪さによると考えられる。一部、南への張り出しがあり、張り出し南端部には杭列による区画や堰が設けられていた。張り出し南端部の杭列によるL字型区画の区画内には礫が敷き詰められ、洗い場と考えられる。なお、南肩部分の杭列には小枝が絡ませてあり、しがらみ構造になっていた。溝最上層からは、平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器などが出土し、平安時代に完全に埋没したと考えられる。

木簡はすべてSD一二のしがらみ付近から出土した。他に、黒色土器を含む各種土器類、人形・糸巻など木製品、長岡宮・京内で二例目となる平城宮六三三三D型式の軒丸瓦などが出土し、「入

「東」「上」と書かれた墨書土器も出土している。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「用錢四百七十三文 樽十六村 直錢 (244)×19×4 019
- (2) 「□□令令令令□□ (155)×(6)×(16) 081
- (3) 「<久米□白□ [郷カ米カ] (75)×20×4 039
- (4) 「□□□ (92)×(9)×4 081

(5)

□□□

160

(1)は板目材で、上端は切り折り。樽十六村を購入する直銭を記している。「樽」と記した木簡は平城宮第三九次調査や、長岡京左京第二〇三次調査でも出土している(本誌第二二号)。(2)は分厚い板目材を柱目取り板に小分けにされたものか。習書簡と考えられるが、呪符の可能性もある。(3)は板目材の荷札木簡で、品目は白米か。「久米」は郡とすると美作・伯耆・伊予、郷とすると大和国高市郡・伊勢国員弁郡・遠江国磐田郡が知られる。(4)は上端は表裏両面から削って切断している。縦に半裁されている。墨痕が看取できるとどまり、判読できなかった。(5)は板目の面を持つ削屑。

なお、釈読にあたっては京都産業大学の井上満郎氏、向日市の清水みき氏・国下多美樹氏・中島信親氏ほかのご教示を得た。

(岩崎 誠)

